

多摩センター駅前花壇概要

丸山 美夏(大学ティーチングアシスタント)

西村 悟郎(人文学部文化学科)

Report on the Adapted Community Garden in Front of Tama Center Station

MARUYAMA Mika, NISHIMURA Goro

Abstract

In 2006, students of horticulture at Keisen University created an organic perennial garden in front of Tama Center station. This is an adapted community garden, covering about 70 square meters. The garden contains three large camphor trees, and two-thirds of the land is shady. Shade-tolerant perennials such as Hosta, Christmas Rose, and Daffodil are planted under the trees, while annuals are in the sunlit zones. There are about sixty different species and one hundred cultivars total. Since its creation, the Keisen students have maintained the garden with natural organic fertilizers and no chemicals. This organic perennial garden requires less labor to maintain than a comparable area of annuals, and we expect to introduce this design to other community gardens in the Tama City area.

1. はじめに

多摩センター駅前花壇(以下、駅前花壇)は、パルテノン通り沿いの植栽柵内に設けられた花壇で、通りを歩く人に安らぎや、ゆとりある空間を提供することによって、都市環境、地域社会へ貢献している。駅前花壇は多摩市のアダプト活動の一環として設けられているが、恵泉女学園大学が花壇のひとつを担当し、学生の学びの場として花壇の管理に当たっている。恵泉の担当

する花壇は次に述べるコンセプトを持っており、新しい花壇のあり方を発信している。

2. 駅前花壇の植栽上のコンセプト

1) 宿根草を主体とし、生態系を重視

今までのコミュニティガーデンは、主に季節の一草花を植栽し花を楽しむための花壇が多かった。そのような一年草主体の花壇の多くは生態系から切り離され、維持管理に多大な労力、それに伴う費用がかかる。

生態系が生まれる持続可能な庭づくりとして、宿根草主体の庭に自然の秩序を取り入れ、多くの手間をかけず、長く楽しめる庭づくりの技術を「エコロジカル・プランティング」という(渡邊、2007)。これはそれぞれの宿根草の生育環境を知り、それぞれの庭の環境に応用することにより、多種多様な植物が共生し互いに維持し合う自然界の関係を実現させる方法である。駅前花壇は、エコロジカル・プランティングの考えに基づいて作られていて、宿根草を中心に、こぼれ種で増える一年草や放任で育つ小球根類を組み合わせている。

2) 葉の美しい植物を多用

近年、カラーリーフと呼ばれる葉を楽しむ植物が見直されてきている。カラーリーフとは、葉姿や葉の色の美しさが際立った植物を言い、そのほとんどが宿根草で、またその多くが、控えめな小花を咲かせる。日本の花壇では今まで副次的存在であると考えられていたが、高温多湿の梅雨から盛夏や半日陰の花壇など、草花が育てにくい環境下では、メインとして使うことができる。

花の時期は短期間でも、葉の観賞期間は少なくとも春から秋まで続き、色は緑の濃淡だけでなく、黒、チョコレート、ブロンズ色などもある。また斑の入り方も白や黄色など様々で、葉の色、斑の入り方は花同様に変化に富んでいる。葉の色だけでなく、形や質感も様々あり、季節によって表情も変わる。花壇で植物を選択する時、花だけでなく、葉の色や形などにもっと注目すべきであり、植物をコーディネートする際、カラーリーフの美しさに気づくと花壇造りの楽しさが広がる。その様な考えに基づいて、駅前花壇では植物の

葉の色合いの美しさに注目して植物を組み合わせている。

3) 半日陰に強い植物を用いる

恵泉女学園が担当している花壇には、クスノキの街路樹が3本植えてあり、そのため花壇の2/3の面積が半日陰となる。つまり一般にシェードガーデンと呼ばれる花壇となっている。そのような環境を考慮して、植栽する植物は日陰に強い宿根草を選んで用いた。日本原産の宿根草、ギボウシやヤブランなどは半日陰に強いものが多く含まれており、それらはこの花壇の重要な植物材料となっている。

4) 有機栽培による花壇管理

庭を育むのは、植物を取り囲む虫や鳥などを含めた自然環境であり、自然のバランスが取れた庭には、様々な生き物が集まり、複雑な生態系を形成する。駅前花壇は肥料としては鶏糞、牛糞などの有機肥料のみ使い、化学農薬を用いない有機栽培による自然風なエコガーデンを実践している。

5) 枕木風木材の使用

通常見られる公共の花壇のようにレンガなどで植栽枡を区切らず、里山風邪の植栽にすため枕木材木(以下枕木と略す)を使用し、花壇内を通り抜けできるように木道風にデザインし施工した(植栽図参照)。枕木はデザイン性だけでなく、手入れや植え込みの際に足場になり効率良く作業ができる、また近くで草花が観察できるなどの利点がある。

以上のような特徴を駅前花壇は持っているが、以下、花壇の発足の経緯、栽培管理、材料植物の順に述べていく。

3. 駅前花壇の作成の経緯

1) アダプト活動として始まる

駅前花壇は多摩市のアダプト活動の一環として始められた。多摩市のアダプト活動の基本理念は「市民が豊かさを実感できるみどり」である。アダプト活動は、ボランティアや市民のグループ、企業、大学などが、公園や道路にある一定の区域について緑化、清掃美化を行う市民参加型の活動である。多摩市では積極的にアダプト活動を実施し、現在(2011年2月)33団体が活

動を行っている。

恵泉女学園大学では、2003年より多摩市アダプト活動の1つである駅前花壇の緑化活動を開始し、当初は人間社会学部樋口幸男准教授が、主にコンテナの維持管理を行っていた。2005年以降は人文学部西村悟郎教授が引き継ぎ管理した。さらに、2006年6月から多摩センター駅前で始まった植栽枡に花壇を造るという新たなアダプト活動に参加し、京王プラザ前にある植栽枡の1区画(30m×20m)の植栽と管理を始めた。担当したのは当時の人文学部英米文化学科のイギリス庭園文化ゼミの学生で、2年目からは文化学科の庭園文化ゼミおよび園芸ゼミの学生が担当した。丸山美夏は植栽枡の花壇作りのデザイン・施行から参加している。花壇作りは開墾から始まり、枕木を木道風に配置し、宿根草を主体として植え込んだ。また、コンテナも花壇と合わせて維持管理した(写真1・2)。なお、花壇管理が授業時間内に終わらない場合は、園芸課外活動として、時間外にもゼミ学生の有志が管理を行った。



写真1 施工前



写真2 施工時

2) コンテナの管理について

コンテナ管理は、2010年度より以下の理由で管理を行わないことにした。コンテナは各季節に咲く一年草を中心に植栽しているので、状態良く保つためには人手と費用がかかる。我々は駅前花壇と同様に、パブリックガーデンとして、コンテナ管理もなるべく労力と経費をかけない管理へ移行するため、乾燥に強い宿根草のハーブなどを組み合わせて寄せ植えをした(写真3・4)。



写真3・4 学生と、香りの良い宿根草のハーブを植栽
秋に草丈60cmほどになり、イルミネーション設置のため移植

それによって、春に植えたハーブが夏越しして、秋に一回り大きく育ったが、10月下旬になるとクリスマスに向けてのイルミネーションをコンテナに設置するため、コンテナの植物を処分するように要請があった。駅前のイルミネーションはパルテノン通りを歩く人たちの楽しみであり、市の意向に従うべきであるが、植物の関わりを通じ命の繋がりを学ぶことが大学の園芸活動の目的の1つであり、この点が改善されない事を理由に、コンテナ管理から撤退することになった。

4. 授業における一年草の播種・育苗および駅前花壇の管理(表1・2)

1) オリエンテーション

春・秋学期の始めの授業でオリエンテーションとして、駅前花壇の経緯、植栽する植物および栽培管理について、上に述べたコンセプトを説明する。特に強調したのは①花壇はシェードガーデン（クスノキの下の半日陰）であること、②植物は宿根草を中心とし、里山風な雰囲気にとどめること、③葉の色の美しさを鑑賞するリーフプラントを多く用いていること、④栽培は有機・無農薬であること、などである。

2) 播種と育苗

各学期のオリエンテーションの後、一年草の播種をする。学生がそれぞれ種類を選び播種する。4月（春学期）は初夏に花壇に植える夏から秋に咲く種類を、9月（秋学期）は冬から春花壇に植える種類を播種する。播種後約1ヶ月に苗をポット上げする。灌水は学生が担当する。

3)一年草の植え替え

花壇は主に宿根草が植えられているが、通路に面した周辺部には一年草を植栽した。植え替えは年に2回で、夏・秋花壇は6～7月、冬・春花壇は11～12月に行った。1年草の苗は学生が育てたものを用いたが、春のビオラなど一部購入したものもある。また、春の花壇には、クロッカス、ミニスイセン、ムスカリなどの小球根類を植えた。

4)施肥

肥料としては一年草では2回の植え替え時に、それぞれ乾燥鶏糞あるいは牛糞を元肥として与えた。また腐葉土をマルチ(20ℓx2袋)として株元に敷き、夏の乾燥防止、および冬の保温対策としたが、近年は行っていない。

5)害虫防除

初年度は夏にアブラムシの発生が見られたので、2年目の3月に自然農薬(唐辛子入りエキス液)を散布した。また、その年4月には、ニームチップ(インドセンダンエキスを加工したもの)を1kg散布した。その後は、アブラムシの発生は見られないので、それらの処理はしていない。

6)花がら摘みと除草

一年草、宿根草の開花に伴い、適宜花がら摘み、切り戻しなどを行った。除草はカタバミ、ハルジオンなどのキク科、スギナ、宿根草の周りのドクダミなどが目立ってきたら行った。

7)夏の灌水

近年は温暖化の影響もあり夏の暑さが厳しく、夏の草花の生育状況があまり良くないのが現状である。クスノキの下では多少日射しが和らぐものの、逆に夕立があっても雨が当たらず、乾燥により衰弱する株も多い。ローメンテナンスの花壇とはいえ、夏の灌水管理は必須で、水やりはアルバイトの学生に任せているが、水やりの有無の判断を含め、事前に灌水管理の指導の必要性を感じている。

表1 月ごとの花壇の主な管理

月	作業内容
4月～6月	駅前花壇の手入れ、夏秋咲き一年草の播種、ポット上げ、花がら摘み、除草
7月	花壇への一年草への植込み
8月	灌水、除草
9月～10月	冬～春咲き一年草の植込み
	球根類や宿根草の植込み
11月～12月	冬春花壇への一年草の植込み、球根類や宿根草の植込み
	一年草の花がら摘み、補植

表2 2010年度の育苗・花壇管理の日程(写真5・6)

作業内容	春学期	秋学期
オリエンテーション・駅前花壇手入れ	4月14日	9月29日
播種	4月21日	9月29日
ポット上げ	5月19日	10月26日
駅前花壇手入れ	5月26日	10月6日
駅前花壇へ植込み	6月23日	12月1日



写真5・6 11月にピオラや育苗した一年草を植え込む

8) 2010年度に播種した一年草の種類(表3)

春・秋学期とも一年草は、まず丈夫で育てやすい種類を選んだ。次に、駅前花壇に用いるものは里山風な庭になるように、半日陰でも花が咲く種類や、

野草の趣きのある小輪で淡めの花色（白・ブルー・クリーム・淡いピンク）を選んで植栽した。実際駅前花壇に植込みした植物は太字の種類*である。（トレニア、クリサンセマム、クロタネソウ、シナワスレナグサ、オダマキ、マトリカリア）

日当りを好むもの、花が大きく原色の種類は、「恵泉女学園前」の信号の脇にある尾根幹線花壇に園芸課外活動として、ゼミの有志の学生と植栽した。

表3 2010年の播種・育苗した一年草の種類

春学期	秋学期
アゲラタム "トップブルー "	アリッサム "スノードリフト"
アゲラタム "ブルーハワイ"	イベリス "アイスバーグ"
キバナコスモス "サンライズ"	カスミソウ "コベントガーデンマーケット"*
ケイトウ "ホルン"*	キンセンカ "ハヤブサ"
コスモス "アーリーミックス"	クリサンセマム "ノースポール"*
サルビア "エボルーション"	クロタネソウ "ペルシャンジュエル"*
サルビア "シズラーレッド"	シナワスレナグサ*
センニチコウ "クイスピンク"*	セイヨウオダマキ "マッカナスジャイアント"*
チトニア "ミックス"	ネモフィラ "インシングブルー "
トレニア "サイクロンバイオレット"*	フロックス "ドラモンドイー "
ニチニチソウ "エクエイターホワイト"	マトリカリア "スノースター "*
ハナアオイ "ラバテラミックス"	モモイロタンポポ "クレピスピック"*
ヒヤクニチソウ "キャンディーミックス"	ラークスパー "シドニーブルーミックス"*
マリーゴールド "アイシーミックス"	リナリア 高性ミックス

9) 主な花木、宿根草、球根類

2010年春現在、駅前花壇に植栽された花木、宿根草、球根類で生育状況が良いものを表4に示した。

表4 駅前花壇の主な花木、宿根草、球根類

植物名	生育型
クリスマスローズ・ガーデンハイブリッド	常緑宿根草
クリスマスローズ・ニゲル	常緑宿根草
ミスキャンタス(ファイリヤブラン)	常緑宿根草
プリムラ・ブルガリス	常緑宿根草
キバナイカリソウ	常緑宿根草
ペンステモン“ハスカーレッド”	常緑宿根草
アジュガ(ジウニヒトエ)	常緑宿根草
ヒューケラ(ツボサンゴ)	常緑宿根草
ティアレラ	常緑宿根草
グレコマ・バリエガータ(ファイリカキドウシ)	常緑宿根草
ブルーベリー	落葉中低木
ヤマアジサイ	落葉低木
アナベル	落葉低木
ギボウシ	落葉宿根草
アガパンサス	常緑宿根草
コレオプシス	落葉宿根草
ミニスイセン	小球根
シラー	小球根
ムスカリ	小球根

5. 主な植物の紹介と生育状況

1)栽培が比較的簡単で、特別な管理を必要としない植物

(1) レンテンローズ(クリスマスローズ・ガーデンハイブリッド)

Helleborus orientalis "Garden hybrida" キンボウゲ科、常緑宿根草、ヨーロッパ原産。英名はレンテンローズ。レント（四旬節＝3月下旬から4月上旬）の時期に咲くクリスマスローズの意味。丈夫で育てやすく、うつむき加減で咲く姿が日本人の美意識に合い、花壇材料として近年人気

の宿根草である。明るい半日陰を好み、盛夏に日陰となるクスノキの下で、良く育ち大株になり、2~3月に赤~ピンク・白の花を咲かせ、花の少ない早春に咲いた。



写真4-1-1

イカリソウの根元で咲く白いクリスマスローズ



写真4-1-2 イカリソウ

- (2) キバナイカリソウ *Epimedium koreanum* メギ科の近畿以北の日本海沿岸、北海道に分布するイカリソウの変種。花はイカリソウと同じ形で、淡い黄色の小花で4-5月に開花する。卵型の葉は冬に紅葉する。夏の日射しに弱い。駅前花壇ではクスノキの下で大株に育った。
- (3) ミスキャンタス *Ophiopogon malayanus* "Variegata" ユリ科の常緑宿根草。和名ファイリヤブラン、ファイリジャノヒゲ。ひげのような流線形の白い斑入り葉で、*Helleborus*属など大ぶりで濃い緑の葉と混植すると、花壇が明るく軽やかな印象になる。シェーディガーデンの花壇材料、カラーリーフとして有用。夏に白い花が咲き、秋に黒い実がなる。常緑宿根草のファイリセキショウ(サトイモ科)も、ミスキャンタス同様カラーリーフとして使える。



写真4-2 白く細い葉が特徴のミスキャンタス、手前の黄色のファイリ葉はセキショウ

- (4) プリムラ・ブルガリス *Primura vulgaris* サクラソウ科、コーカサス原産。一般には、日本原産のものをサクラソウ、外国産のものをプリムラとよんでいる。夏の高温多湿に弱いのが、クスノキの下で夏越し、年々大株になり、早春にクリーム色の花が咲く。ミニスイセンや黄色系のビオラなどと一緒に、黄色の小花が春の庭を明るく演出する。



写真4-3 小球根の芽が出始める頃、2月下旬には咲き始める

- (5) ペンステモン・ハスカーレッド *Penstemon x hybridus* "Hascar Red"、ゴマノハグサ科、常緑宿根草、北アメリカ西部原産。5月に白い花を咲かせ、草丈50cm程になる。花のない時期は、銅葉色の葉が美しくカラーリーフとしても有用。特に芽吹きは美しさが際立つ。高温多湿に弱いのが、クスノキの下で、風通しが良い駅前花壇の環境に合い、大株に育った。



写真4-4 銅葉色の葉が際立つペンステモン、手前はリシマキア・ボジョレー

- (6) アジュガ *Ajuga reptans* シソ科、ヨーロッパ原産で多湿にやや弱いのが、駅前花壇の環境に合いランナーでよく殖えた。グランドカバーになる。葉色の違う品種がたくさんあるが、斑入り種の方は従来品種よりやや弱い。5月に青い小花が咲く。



写真4-5-1

白とピンクの斑が入るアジュガ・マホガニー



写真4-5-2 開花の様子

- (7) グレコマ・バリエガータ *Glechoma hederacea* 'Variegata' シソ科、半常緑宿根草。和名フイリカキドウシ、英名"Ground Ivy"。世界に広く分布する丈夫なグラウンドカバーである。繁殖力旺盛でランナーで広がる。斑入り種はカラーリーフとしても有用で、秋から冬は白斑の部分が紅葉する。春に薄紫色の小花が咲く。現在、枝変わりで伸びる斑のない種が旺盛に生育し、8割ほどが斑のない種で占めている。



写真4-6 グレコマ・バリエガータ

- (8) ヤマアジサイ *Hydrangea serrata* ユキノシタ科、落葉低木、日本・朝鮮半島南部原産。原種は白であるが、園芸種はピンク、赤、青などの花色がある。一昨夏の猛暑と乾燥(小雨)でダメージが大きかった。



写真4-7 ブルーのガクアジサイ、後方はペンステモンの白い花

- (9) アナベル *Hydrangea arborescens* "Annabell" ユキノシタ科、落葉低木、アメリカ原産。初夏の蕾みは淡い緑で、開くにつれて真っ白になる。ひとつの花は小さいが、手鞠状の花は直径20cmくらいとなり、草丈も80cmほどで存在感がある。クスノキの下で雨に当たらないため、ドライフラワーになり秋まで楽しめる。ヤマアジサイ同様、一昨夏は猛暑と乾燥の害を受けた。
- (10) ギボウシ *Hosta* spp. ユリ科、落葉宿根草、東アジア原産。葉色の変化が多く、春から秋にかけて半日陰の花壇の彩りに欠かせないカラーリーフ。日本産のギボウシをもとに、様々な園芸種が作出されている。シェードガーデンの代表的な植物である。初夏に白から薄紫色の花を咲かせる。



写真4-8 咲き始めのアナベルとギボウシ

- (11) アガパンサス *Agapanthus praecox* subsp. *orientalis* 常緑宿根草、ユリ科、南アフリカ原産で英名は“African lily”、和名はムラサキクンシラン。一般的な *A. africanus* に比べ小型で草丈50cm前後、細葉で花も小さいが花

付きが良い。



写真4-9 初夏に淡い青色が爽やかなアガパンサス

- (12)ヘリオプシス *Heliopsis scaberrima* “Summer Nights” キク科、ヒメヒマワリの仲間。花は鮮やかな黄色で一重咲き、赤紫色の茎が特徴となっている。7-10月に咲き、暑さに強く、生育旺盛で丈夫な宿根草。切り戻して分枝させ、草丈80cm程で咲かせる。日向を好むので、日当たりのいい場所に植えている。
- (13)ミニスイセン *Narcissus "Tete-a-Tete"* ヒガンバナ科、ヨーロッパ・地中海沿岸原産。黄色のラッパスイセンのミニ種、草丈20~25cm。放任で毎春咲く。原種のプリムラなど、黄色の小花が春の訪れを告げる。



写真4-10 ミニスイセン

- (14)シラー *Hyacinthoides hispanica* ユリ科の球根類。ヨーロッパの針葉樹林に原生する。和名はツリガネスイセン、英名はWild Hyacinth。5月に花が咲く。花色は青が一般的だが、白やピンクもある。クロッカス、ミニスイセン、ムスカリなどの春の小球根の最後を飾る。小球根は、花も小さく丈も低いが、コロニーを作って植栽すると効果的。駅前花壇ではブ

ルーベリーの根元に群生させている。他の小球根類同様、放任で毎年咲く。

- (15)ブルーベリー *Vaccinium* spp. ツツジ科、落葉中低木。早春の芽吹き、春に白いベル型の花を咲かせ、夏には青い実が成り、秋は紅葉し、楽しめる時期が長い。クスノキの下で実成りはあまり良くないが、草花の背景となるよう植栽している。



写真4-11 ブルーベリーの白い花とシラーの青い花

- (16)ビオラ *Viola cornuta* x *wittrockiana* スミレ科の一年草草花、ヨーロッパ原産。花色が豊富で、寒さに強く、11月下旬から5月中旬まで、華やかに花壇を彩る。冬～春花壇の代表的草花。パンジーより原種に近いビオラは半日陰でも咲くので、駅前花壇では花が可憐なビオラを植える。気温の上昇と共に、アブラムシが付く傾向にあるが、駅前花壇では2年目以降は被害にあっていない。



写真4-12-1、12-2 色とりどりのビオラ

- (17) シノグロッサム *Cynoglossum ambile* ムラサキ科の一年草。中国原産で、和名はシナワスレナグサ、英名はChinese forget-me-not。同じ科のワスレナグサ (*Myosotis alpestris*) 同様、こぼれ種で殖える。その他、オルレア・グランディフローラなどもこぼれ種で毎年咲き、ナチュラルなガーデンを演出する。



写真4-13 こぼれ種で咲いたシノグロッサム

- (18) ジギタリス *Digitalis purpurea* ゴマノハグサ科、ヨーロッパ・西アジア原産。原産地では宿根草だが、日本では冷涼地を除き、二年草扱い。和名はキツネノテブクロ、英名はFoxglove。花穂が伸びて80cm~1mになり、存在感があり、ボーダー花壇の後方に植えられるが、半日陰でも咲き、木陰の自然風の庭にも合う。駅前花壇では、唇弁に斑が入らないスノーシンバル(白)と、アプリコットを毎年植えている。近年生育状況があまり良くない。



写真4-14-1

アプリコットのジギタリス 前方はマトリカリア



写真4-14-2

ジギタリス・アルバ

- (19) ペンタス *Pentas lanceolata* アカネ科の一年草、熱帯アフリカ、アラビア

半島原産。ペントスはギリシア語の5を意味し、星形(5角形)の小さな花をたくさん付ける。梅雨から盛夏にかけて、花壇を元気に彩り、霜が下りる晩秋までよく咲く。近年は温暖化の影響で夏の暑さが厳しく、ペチュニア、サルビアなどはあまり状態が良くないが、ペントスは夏の花壇にお勧めできる。

2)栽培がやや難しい植物

- (1) クリスマスローズ *Helleborus niger* キンポウゲ科、常緑宿根草。*Helleborus*の原種、園芸種に比べ、夏の高湿多湿が苦手な種で、夏越しできる株が少ない。オリエンタリスより早く1月～2月に真っ白な花を付ける。年が明けて花が少ない時期に咲く貴重な花なので補植した。他に*H. odorus* は問題なく育っている。

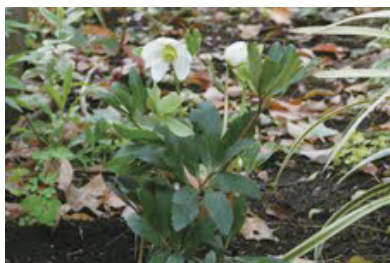


写真4-15 2009年に補植したニゲル、2月に花を咲かせた

- (2) ヒューケラ *Heuchera* spp. ユキノシタ科の常緑宿根草。*Heuchera* "Palace Purple"、*H.* "Pewter Moon"など品種が豊富で、カラーリーフとして通年楽しめるが、厳しい寒さでは地上部が枯れる。和名ツボサンゴ。明るい半日陰を好み、夏の高湿多湿が苦手。4～5月に長く花茎を立ち上げ、その先にピンクや白の小花を咲かせる。草丈35～45cm。



写真4-16-1 パレスパープルの芽吹き

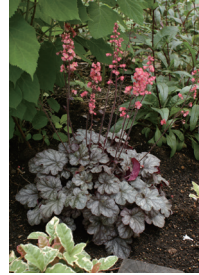


写真4-16-2
ピュータームーンの赤い花

- (3) ティアレラ *Tiarella* "Spring symphony" ユキノシタ科。ツボサンゴに比べて品種のバリエーションは少ないが、やや丈夫で、花の時期は春早くから初夏までと開花期が長い。



写真4-17 ティアレラの花。奥は銅葉のヒューケラ。

3) 今後の植栽計画

早春から初夏にかけて咲く花が多く、秋に咲く宿根草が少ないため、シュウメイギク、ホトトギスなどや、紅葉するカラーリーフ、秋に穂が出るグラス類を少しずつ補植していきたい。

6. おわりに

多摩センター駅前花壇や、尾根幹線道路沿いの小さな花壇はゼミの学生が中心に維持管理を行い、通り過ぎる人が四季の移り変わりや自然を感じるスペースになっている。

地球温暖化問題など、地球の自然環境保全が重要視されている昨今、コ

コミュニティガーデンの役割は、花を育て楽しむという美化効果の域に留まらず、二酸化炭素軽減のための緑化効果という役割も付加され、大きくなっている。多摩地区における恵泉女学園大学が担当する花壇は、自然の小さい生態圏としての花壇の意義などのメッセージを提示して、魅せる庭から発信する庭へ、そのコンセプトを展開している。

エコロジカル・プランティングの花壇管理は、ローメンテナンスであって、決してノーメンテナンスではなく、最低限の管理は必要である。特にコミュニティガーデンは、(地域)人が関わってこそ、人を魅了する花壇になり、その魅力を人に伝えることが出来ると思う。

ゼミの授業での実習は花壇の植込み作業で終わり、種から育てた草花が花壇で花を咲かせ、ガーデンを彩っていく様子を観察することは学生たちの自主性に委ねられる。花壇造りの魅力は、植物が育っていく課程にあり、学生が限られた時間の中で、花壇造りの楽しさや自然の大切さを感じられるような教育プログラムを模索していくことも今後の課題であろう。

参考文献

- Christopher Brickell監修 1989 *The Royal Horticultural Society -Gardener's Encyclopedia Plants & Flowers-* Dorling Kindersley Limited
- 杉井明美監修 1995『花図鑑 育てる花』草土出版
- Christopher Grey-Wilson 1996『野草の写真図鑑 Wild Flowers』日本ヴォーグ社
- 渡邊美保子 2007「宿根草のエコロジカル・プランティング」
BIO CITY No.36 pp.106-111 ビオシティ
- 平山美由紀 2009「市民の園芸活動—多摩センター駅前アダプト活動—」
2008年度恵泉女学園大学卒業論